学校教育目標　「未来を拓くやさしさとたくましさをもった生徒の育成」

平成２５年度　　学校評価　自己評価書（一覧）

安芸市立清水ヶ丘中学校

項目	中長期経営目標	短期経営目標	評価項目	達成基準	達成状況	自己評価	改善方策	関係者評価講評	関係者評価
教育課程・学習指導	・学習指導要領に基づく教育の推進によって生徒に生きる力を育む。	①学習指導要領の趣旨を踏まえた各教科・領域の諸計画を整備する。	①学習指導要領の趣旨を踏まえた各教科・領域の諸計画を作成し、組織的な研究推進体制のもとで研究・実践を進める。	・学習指導要領の趣旨を踏まえた各教科等の諸計画が整備されている。 ・研究委員会と三部会が連携して組織的に研究が進められている。	・全教員の授業研究（年間１８回）を実施し、内３回は公開授業研究会とし、東部地域の拠点校として、研究内容の普及に努めた。 ・「学習指導要領の趣旨をふまえた各教科等の諸計画の見直しを図っている」と答えた教員は１００％である。 ・研究委員会と三部会が連携して組織的に研究が進められていると答えた教員は７１．４％である。（Ｂ）	Ｂ	①研究委員会と三部会の活動内容を整理し、研究テーマにより直接的につながった活動ができるようにする。 ②思考力・判断力・表現力を高める指導方法の研究の焦点を絞ることによって授業改善をさらに進め、学力向上につなげていく。 ③ＰＴＡの「家庭教育宣言」による啓発を継続し、保護者の協力を得るように努める。	・思考力・判断力・表現力は今求められているものであり、それを高めるための授業研究を年間１８回実施していることはすばらしいことである。これらの力をつける取組を今後も続けてもらいたい。 ・自分の意見を言うことや人の意見を聴くことは大事なことである。引き続き指導を続けてほしい。 ・家庭学習は時間だけではなく、質と量を充実させることが重要であり、そのためには学習のスタイルを確立させること、限られた時間の中で集中して取り組むこと、毎日続けることなどが必要である。家庭学習を充実させるためには、学校が学習の仕方を指導したりすることと、家庭が学習の習慣づけをしたりすること等の両面から子どもに働きかける必要がある。	Ｂ
	・言語活動を充実させ、基礎学力の定着と思考力、判断力、表現力を育成する。	②教科等の目標を達成するための言語活動を充実し、分かる授業づくりを目指す。	②言語活動を充実し、学習内容の定着や思考力・判断力、表現力を高める指導方法の改善に取り組む。	・言語活動を効果的に取り入れ、思考力・判断力・表現力が高まる授業が行われている。 ・「授業がわかる」と答える生徒が９０％以上 ・「自分の考えや意見が言えた」と答える生徒が８０％以上	・「言語活動を効果的に取り入れ、思考力・判断力・表現力の育成を図る授業に取り組んでいる」と答えた教員が８１％である。 ・授業が分かると答えた生徒が　86%、自分の考えや意見が言えた生徒は79%で目標には少し届かなかった。　(B)				
	・自学自習の習慣を身に付け、生涯学習の基礎を培う。	③家庭学習の定着と質を高める取組の充実を図る。	・教科ノートの取り方の指導を徹底し、家庭学習の定着と質の向上を図る。 ・ＰＴＡによる「家庭教育宣言」を配布し、家庭との連携のもと家庭学習の定着を図る。	・「自主学習ノートの提出率」８０％以上 ・「家庭学習1時間以上」６０％以上(塾除く) ・「家庭学習中はテレビを見ない」を７０％以上	・自主学習ノートの提出率は９０．７％で目標を達成できた。 ・「家庭学習１時間以上」の生徒は５９％で、目標に少し届かなかった。 ・家庭学習中はテレビを見ない生徒は７３％で目標を達成できた。 (A)				
生徒指導	・個々の生徒に自己指導能力を育成する。	①問題対処だけではなく、開発的・予防的な生徒指導の充実を図る。	①日々の教育活動に生徒指導の三機能を位置づけるとともに、社会と学校のルールを関連づけて、規律ある生徒の育成を図る。また、生徒会活動を活性化し、共に学び合い高め合う生徒集団づくりに取り組む。	・自分で考え、判断してよりよい行動ができる。 ・学校のきまりやルールが守れている。 ・気持ちのよいあいさつができる。 ・自主性や協力的な態度で取り組んでいる。	・自分で考え、判断してよりよい行動ができる力がついてきていると答えた教員３８．１％ ・生徒は学校のきまりやルールが守れていると答えた教員１４．３％、生徒８９％ ・生徒は気持ちのよいあいさつができると答えた教員４７．６％、生徒８７％ ・生徒は自主性や協力的な態度で取り組んでいると答えた教員７１．４％　　(C)	Ｂ	①生徒指導の三機能（自己存在感、共感的な人間関係、自己決定）を授業、学校行事、部活動等で位置づけることを徹底する。規範意識の向上、挨拶励行等について生徒会執行部やキャプテン会を中心として生徒主体の取り組みを促進する。 ②道徳的な態度や実践力がさらに高まるように学校行事など様々な機会をとらえ道徳的な視点での指導を充実する ③QU結果の活用を継続する。スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーと連携し、校内支援委員会を中心として組織的な支援を継続する。	・子どもたちは、街中で会った時など「あいさつ」はよくできている。 ・自転車の並列走行はたまに見かけるし、例えば部活動で校外に出た時に荷物を雑多に置いたりしている場合もあるので引き続き指導を行ってほしい。 ・「ルールを守ること」や「あいさつ」などについて、生徒と教員のアンケート結果があまりにも違いがありすぎるのでは。生徒にどのようなことをどこまで求めるのかによっても違ってくるので、お互い共通理解を深めることが必要ではないか。しかし、「まだまだ取り組む余地はあるので子どもに対する先生の評価は厳しくてもよい」という考え方もある。 ・道徳面では、指標の達成状況がもう少し上がってくるように取り組んでほしい。読み物資料の活用などによって人に認めてもらうための立ち居振る舞いなどができるように道徳的な態度や実践力を高めてほしい。	Ｂ
	・人の心の痛みがわかり、思いやりのある心やさしい生徒を育成する。	②道徳教育を充実し、道徳的な態度や実践力を育成する。	②道徳の時間の指導を充実し、道徳的な態度や実践力を高めるとともに、道徳参観日等を通じて保護者との連携を図る。	・「道徳の時間は楽しい」を８５％以上 ・「自分にはよいところがある」を８０％以上 ・道徳参観日の保護者の参加率を６０％以上	・道徳の時間は楽しいと答えた生徒は８１％ ・自分にはよいところがあると答えた生徒は７９％ ・道徳参観日の保護者の参加率は６６．８％（生徒数に対する参加保護者数）　(B)				
	・いじめや不登校の生徒を出さない学校づくりを推進する。	③学校を活性化することや、生徒理解に基づく適切な支援によっていじめや不登校をなくす。	③全ての取り組みに意味づけ価値付けを行い、学校を活性化することで楽しい学校づくりを進めるとともに、毎職員会での生徒理解やＱ－Ｕアンケートの活用等により適切な支援を行い、いじめや不登校を出さない取り組みを充実する。	・ＱＵアンケート結果を学級経営や個々の生徒支援に活用できている。 ・ＱＵアンケートの満足群の割合を６０％以上 ・いじめの解消率１００％ ・新たな不登校の生徒を出さない。	・ＱＵアンケート結果の活用については、講師を招聘した研修会を２回持ち、学年ごとの分析に入ってもらったり、学級ごとに診断をしてもらい具体的な支援について指導・助言をしていただいたことで活用が進んだ。 ・ＱＵアンケートの満足群の割合は６９％で目標を達成している。 ・いじめは１件発生したが解消している。 ・不登校率は１．４％で昨年の不登校率２．９％から１．５ポイント改善されている。しかし、新たな不登校は１名出ている。　(A)				
進路指導	・計画的な進路指導により、自己の個性や適性に応じた進路選択能力を育成する。	①自己の個性や職業に対する適正を理解し、進路選択能力の基礎を培う。	①夢や目標を持たせ、それを今の学習や部活動などの取り組みと関連させて努力するようにする。また、学年段階に応じた進路学習を実施し、自己理解や職業意識の向上を図る。	・夢や目標を持つことができて、それに向かってあきらめずに粘り強く努力している。 ・発達段階に応じた系統的な進路指導ができている。 ・自己理解と将来の目標が持てている。	・生徒は夢や目標を持ちそれに向かって努力していると答えた教員４７．６％、目標を持って学校生活をおくっていると答えた生徒８１％ ・特別活動や総合的な学習の時間などで系統的な進路指導ができた。　(B)	Ｂ	①キャリア教育全体計画に基づき、見直しを加えながら特別活動や総合的な学習の時間を中心に、発達段階に応じた系統的な指導を行う ②キャリアアドバイザー等による講話や進路学習、進路面談等を通して、将来の目標を持たせ、現在の生活を将来につなげていくような指導をさらに充実する。 ③職場体験学習を通して、職業観、勤労観を養うとともに、コミュニケーション能力やマナーなどの社会性を高める指導をさらに充実する。	・将来のことについて早くから考えることが必要であり、進路選択ができるように情報提供をしたりする取組は以前に比べてよくできており取組としては悪くない。 ・自分の将来像を最終的な目標（中長期）、高等学校への進学や資格の取得（短期）というように整理して持たせる工夫が必要である。 ・ボランティア活動も清掃活動などのようなものだけではなく、例えば安芸高が実施している観光ガイドのようなものにより、社会性やコミュニケーション能力など将来社会に出てから役に立つような能力を育ててほしい。 ・１年生から高等学校をどこにするかを考えるのは難しいのではっきり決めるのは３年生の部活動が終わってからになるのでは。しかし、それまでに自分の良さを知り、自分がどういう人間かを考えることが大事であり、それに基づいて進路選択をしていくことができるように指導してほしい。 ・生徒全員が夢を持てるような取組をさらに充実させてほしい。	Ａ
	・キャリア教育を充実し、正しい職業観と社会性を育成する。	②進路講話等を通して、将来の進路や生き方を考える力を育成する。	②キャリアアドバイザー(企業人や先輩)等の講話を聞く機会を設定し、将来を見据えた進路目標を設定し、自己の進路実現に向けて努力する態度を養う。	・キャリアアドバイザーの講話を通して自己の将来や生き方を考えている。 ・将来の進路目標実現のために学習や生活を改善しようとしている。	２年：１１月　公立高校入試制度についての進路講話 （県教育委員会高等学校課指導主事） ２月　職業講話（ビスタワークス研究所　結城貴暁氏） ２年生で実施し、講話を通じて現在の学習や生活を将来につなげていくことの大切さをより明確に自覚することができた。　(B)				
	・働くことの大切さを理解し、進んで仕事ができる生徒を育てる。	③体験活動を多く取り入れ、生徒の職業に対する意識を高める。	③職場体験学習を実施し、働くことの喜びや大切さを学び、職業意識を高める。	・職場体験学習を通して、望ましい職業観や勤労観を理解し、自己の将来像を描くことができている。	・３年生が６月に３０の事業所の協力を得て、３日間の職場体験学習を実施した。 ・文化祭では、代表して３つのグループが体験発表を行い仕事の大変さ、責任感の必要性、達成感や充実感を味わったことなどが報告され、やがて同じように体験学習を行う１・２年生に良い刺激になった。　(A)				
安全管理	・生徒の安全確保のための体制の整備を図る。	①学校安全計画、防災計画の見直しと周知徹底を図る。	①安全計画や防災計画、マニュアル等の見直しを行い、生徒の安全を確保するための環境を整える。	・安全計画や防災計画が整備されている。 ・南海大地震の新想定を踏まえた、対応マニュアルを作成している。 ・２・３年生の上履きのシューズへの切り替えが進んでいる。	・防災マニュアルの年度替わりによる更新や修正が必要な部分の差し替えを行った。 ・２・３年生の上履きシューズへの切り替えは進んでいない。（Ｂ）	Ａ	①常に実態に応じた安全計画、防災マニュアル等を整備し、生徒の安全確保を徹底する。２年生の上履きシューズへの切り替えを年度替わりの時期に働きかける。 ②交通安全教室、避難訓練、防災学習等を継続して実施し、事後や災害等の予防措置と対応力を強化する。 ③保護者、SGL、その他関係機関との情報交換や連携をさらに密にし、生徒の安全確保に努める。	・生徒への予告なしや色々な場面を想定した避難訓練、防災備品の使い方を含めた防災学習などこれまで関係者評価講評で提言してきたことが一定実施できていることは評価できる。 ・今後の課題として、防災備品がなくなった後や使えない状況になった時にどうするかという想定のもとに、使える物だけで工夫する体験をしておくことや、教職員にも知らせずに抜き打ちで訓練を実施することなどにも取り組めたら理想的である。 ・安全面での取組は、以前より内容が充実してきている。しかし、自転車の乗り方は十分ではない部分があり、並列運転や暗くなってからのノーヘル、ヘルメットのあごひもを締めていない等がまだあるので引き続き指導をしてもらいたい。 ・上履きのシューズへの切り替えは進める必要があるが、子どもだけではなく教職員にも徹底してほしい。	Ａ
	・災害に対する理解を深め、災害に備える態度を育成する。	②計画的に災害訓練や防災教育、安全教室等を実施する。	②避難訓練や交通安全教室等での啓発に努めると共に、危険箇所については早急に解消する。 ③防災学習で防災備品の存在を知り、防災備品を使えるようにする。	・施設等の安全点検を実施している。 ・多様な場合を想定した避難訓練を実施し防災意識を高める。 ・避難場所となった場合に、中学生が支援者として活動するために防災備品等が使える。 ・ヘルメット着用や自転車の乗り方のマナーが徹底されている。	・施設等の安全点検を実施した。 ・１回目の避難訓練は授業中に、２回目は５校時終了２分後で生徒が様々な場所にいる時間帯に実施した。また、２回とも生徒には日時を知らせずに抜き打ちで実施した。 ・１回目の避難訓練後の防災学習では、市危機管理課の職員に来てもらい、防災備品等の使い方等の学習を行った。 ・１０月には宮城県気仙沼市から講師を招聘し防災講演を実施した。 ・自転車の乗り方については、４月に１年生対象に交通安全教室を実施した。また、地域の方々から自転車の乗り方について２・３回ご意見をいただき、全体へ指導した。まだ一部にはノーヘルや並列運転がある。（A）				
	・関係機関と連携し、学校の安全管理体制の充実を図る。	③保護者や関係機関との連携を図る。	④保護者、SGＬ、その他関係機関との連携を密にし、生徒の安全を守る。	・関係機関と定期的な情報交換を行い、情報を生徒の安全確保に生かしている。	・教育委員会や定例の補導委員会等の関係機関との定期的な情報交換を行い、指導に生かしている。 ・不審者情報は、随時保護者に周知を行っている。（A）				
保護者・地域との連携	・地域や保護者の期待に応える学校づくりを目指す。	①保護者・地域の願いや意見を聞き、学校教育の改善に生かす。	①開かれた学校づくり推進委員会や学校評価アンケート等により保護者・地域の声を聞き、学校教育に生かす。	・学校評価アンケートでは、生徒は６割以上の項目で肯定的評価８５％以上、保護者は８０％以上	・生徒は５割以上の項目で肯定的評価が８５％以上、保護者は４割６分の項目で８０％以上といずれも目標には届かなかった。７０％未満の項目数は昨年度と同じだが、「ボランティアへの参加」、「生徒が悩みを教職員に相談」が９ポイント下がっている。　(C)	Ｂ	①肯定的評価が低い項目について、要因を明らかにし取り組みを見直す。 ②学校の取り組みについての考え方等をもっと積極的に情報発信し、保護者の理解を得て保護者と共に教育に当たる。 ホームページをさらに活用する。 ③ボランティア活動の意義を生徒に理解させ、さらに参加者が増えるように働きかけを強化する。	・学校評価アンケートにおける「生徒が悩みを教職員に相談」の部分の数値が上がってくるように、生徒と教職員の共感的な人間関係をさらに強めてほしい。しかし、悩みの相談は先生だけではなく、先輩や友人に話すことによって気持ちが楽になったり解決につながったりすることがあるので、アンケート調査の問い方の工夫も検討を。 ・学校からの情報発信は一定できているので、あとは学校の目指す方向性や取組の意義などについても学校便り等で示してもらったらさらによい。 ・ＰＴＡ・校内駅伝大会は、生徒、保護者、教職員が一緒に取り組んでおり、よいことである。 ・ボランティア活動は、人対人の活動によってコミュニケーション能力の向上を目指してほしい。理想は、自分の言いたいことを相手を傷つけずに言えるようになること。 ・ボランティア活動は全員が１年間に１回は参加するようにするという考え方もあるが、できれば２回、３回と参加できればなおよい。ある地域ではボランティア活動のある日は部活動を休みにしている。子どもたちにボランティア活動を企画させてはどうか。 ・職場体験学習は地域からも歓迎されており、今後も継続して取り組んでもらいたい。	Ａ
	・学校から情報発信を行い保護者、地域、関係機関との連携を深める。	②学校からの情報を積極的に発信し、開かれた学校づくりを推進する。	②学校通信等を定期的に発行し、学校の情報を知らせると共に、保護者、地域との連携や啓発に努める。	・毎月１回学校通信を発行。 ・学校ホームページによる情報発信 ・学級通信、保健便り等で学級や生徒の状況を発信	・毎月１回定期的に学校だよりを発行し、情報発信をしてきた。学校評価アンケートでは、８２％（昨年比－３ポイントの肯定的評価を得た。学級の家庭への連絡や情報提供は、８４％の肯定的評価を得た。　(A)				
	・保護者・地域との交流を図る。	③学校行事等への保護者の参加やボランティア活動を積極的に推進する。	③学校行事や地域のボランティア活動等を通して、保護者や地域との交流を推進する。	・保護者参加の校内駅伝大会の実施 ・ボランティア活動への積極的な参加	・保護者参加の校内駅伝大会は、６０名の保護者等の参加を得て開催できた。 ・ボランティア活動等への参加状況 ①ちくたく通清掃（42人）②清香園訪問（87人）③あき元気フェスタ（14人）④薬物乱用防止キャンペーン（4人）⑤安芸タートルマラソン（4人）⑥青少年育成安芸市民会議公園清掃（9人）⑦社会を明るくする運動（5人）⑧ペットボトルキャップ収集（ワクチン１２３人分）　(B)				